

Kummon Letter

歳を取ると主観的な時間の流れがどんどん速くなると言いますが、本当にその通りだと痛感させられるこのごろです。毎日が飛ぶようにすぎ、机に向かっていてもふと気がつくと何時間もたっています。2000年の到来はつい先日のことと思っていたら、もう新しい年度に入っていました。

そこで新年度入りを機会に、この公文レターも構想を新たにして、連載を始めてみたいと思います。テーマは、「情報化と近代文明」として、以前出した『情報文明論』の続編というよりは、“情報文明”について私がいま考えているところを、解説風書き下ろししてみることになります。

実は、昨年秋に、もと私の授業に出ていたことのある大蔵省の中尾国際機構課長の依頼で情報文明についての概説を試みたところ、なかなか面白いので新書一冊分くらいにまとめてみてはどうかと勧められました。確かに、情報革命の進展はいよいよ加速しているので、本格的な著作をと考えていた日には、いつになっても作業が終わらないおそれがあります。というわけで、いってみれば中間報告のつもりで、あまり肩に力を入れないで議論してみるのも悪いことではないかもしれないと思うにいたりしました。

予定としては、毎回1章分くらいをお届けして、半年ほどでとりあえず一冊にするといったペースで進むことにします。その上で、頂戴したご批判、コメントを参考にして加筆訂正して最終稿にしたいと思いますのでどうかよろしくお願いいたします。

公文俊平

April 10, 2000

1

1

この本では、近代文明の進化、とりわけ現在急激に進行している情報化と、それがもたらす近代文明の新しいあり方について読者と共に考えてみたい。そのためには、まずこの本で使う基本的な用語の説明から始めるのがよいだろう。

“文明”とは、“文化”とならんで、人間の“社会”がもつもっとも基本的なマクロ的特性の一つである。他方、社会を構成している個々のミクロ的要素としては、“主体”(個人や組織)を考えておく。つまり、社会とは、「文明や文化を共有する主体の集合体」なのである。

社会 = {主体、文化、文明}

それでは“主体”とは何か。ここでは、主体とは次の三つの基本的特性を持つ存在だと考えておく。すなわち、

1. 自他分節：主体は、“世界”を“自己”ないし“自領域”と“他者”ないし“他領域”とに分ける。自領域と他領域との間には“境界領域”がある。境界領域は、その内部にはなにも存在しない領域、つまり境界線としてイメージできると考えてもよいが、自領域と他領域のどちらにも属する“共通領域”や、どちらにも属さない“中間領域”からなると考えてみることもできよう。

複数の主体からなる“社会”においては、ある主体にとっての他領域の一部は、他の主体の自領域になっている。また、ある主体にとっての世界は、その主体自身が属している“自社会”とその“環境”とに分けられる。“環境”それ自体は、他の社会からなる“他社会”とそれ以外の“自然”とに分けられる。

第1図：自他分節



世界 = {自領域、境界領域、他領域} 世界 = {自社会、{他社会、自然}}

2. 認識と評価：主体の自領域は、“心的領域”と“物的領域”とに分けられる。いいかえれば、主体は、漢字の「惣」という字で表すことがふさわしい統一体なのである。主体は、その心的領域において、さまざまな“観念”の助けを借りて、世界を認識し、評価する。

主体による世界“認識”の特徴は、さしあたり次のように考えておこう。すなわち、主体は、世界をそのさまざまな構成要素、すなわち“個物”に分解する。そしてそれぞれの個物について、その諸“属性”（重い、固い、赤い等々）を識別する。個々の属性は、さまざまな“変域”ないし“値域”（ $1 \cdot 0$ という二値、大・中・小やプラス・ゼロ・マイナスという三値、整数値、実数値等々）をもつ“変項”としてまず認識され、ついでその特定の“値”が識別される。¹これらの変項の値が、時間や空間といった“座標”との関係で指定されている場合には、それらは、その個物が（ある時点、ある場所で）とる“状態”として認識される。また、二つの個物（ないしその状態）の間関係は、もっとも典型的には、二つの変域集合の元相互間の対応関係として認識される。²

多くの場合、個物は、それを構成している要素的な個物（モノ）と、それら間関係（コト）とに分解できる。モノおよびコトの集まりとして認識されている複合体としての個物のことは、“事物”と呼ぶのが適切だろう。

主体による世界（ないしそれを形作る事物）の“評価”とは、一群の事物あるいはそれらの状態に、望ましさの順序をつけることである。以下では、「主体の評価の対象となる事物」のことを、“財”と総称しよう。

3. 行為：ラッセル・アコフらの“産出関係”という観念を援用していえば、ある時点である事物がとる状態は、それに先立つ時点でさまざまな事物（“産者”）がとる状態の“作用”の結果としての“産物”である。一般に、産出関係は多数の産者と産物との間関係であると考えられ、個々の主体は限られた時間内に、その全容をすべて認識することはできない。つまり、ある産出関係の産者や産物に関する主体の認識は、常に不完全である。それにしても、一つの社会を構成して

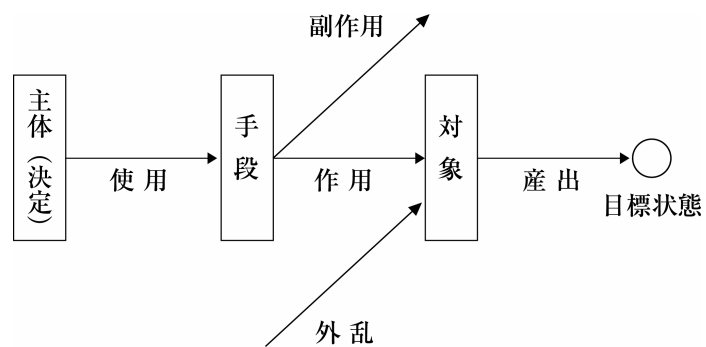
¹たとえば、「象は鼻が長い」という言明は、“象”という個物の属性を表す変項の一つである“鼻”に注目して、その値が“長い”という認識を示している言明だと解釈できる。

²たとえば、「僕はウナギだ」という言明は、レストランで何人かの人々のグループが、メニューの中からそれぞれ料理を注文しているといった状況を前提として、注文者の集合と料理の集合との間の対応関係（という直積集合）の元の一つを指定した言明だと解釈できる。同様に「黄熱病は蚊が媒介者だ」というたぐいの言明も、伝染病の集合と媒介者の集合を前提とする文脈の中では、なんの紛れもなくその意味が解釈できる。

いる主体が、「万物はなんらかの形で相互作用しあっている。とりわけそうした作用の少なからぬ部分は、その主体自身の状態に影響を及ぼす」といった一般的な認識を、知らず知らずのうちに通有していることは、十分ありえるだろう。³

事物の中には、主体がその状態を変更しうるものがある。主体が、ある産出関係を想定して、その産者の一部について特定の作用状態を取らせること（すなわち、ある特定の仕方ですべて“使用”すること）によって、ある産物（ないしその特定の状態）の産出を意図することを、主体の“行為”という。意図された産物（の状態）は、行為の“目標”であり、使用される産者は行為の“手段”である。したがって主体の行為は、その“目標追求行動”だということができる。このような見方からすれば、主体の行為は、心的領域における手段の使用の選択・決定と、物的領域における決定の実行とからなっているといえよう。

第2図：主体の行為

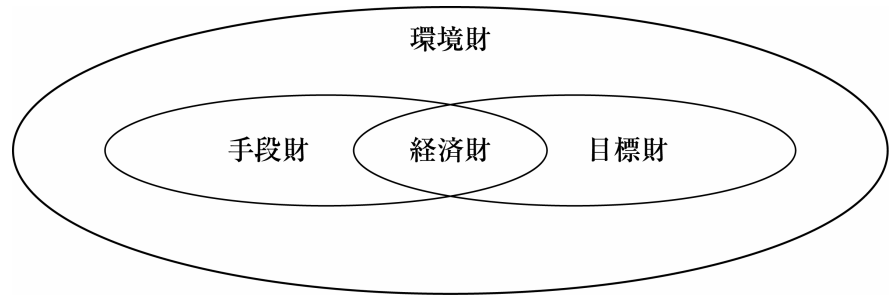


“財”すなわち主体がその状態を評価の対象としている事物の中には、主体の行為を通じてその状態を変更できる財、すなわち“目標財”がある。また、主体がそれを使用できる財、すなわち“手段財”がある。「目標財でも手段財でもある財」は狭い意味での“経済財”と呼ぶのが適切だろう。なぜなら、この意味での経済財は、それを手段として使用できるばかりでなく、それ自体の状態を変える　たとえば増やしたり、その質を改善したりとか　できるからである。他方、「目標財でも手段財でもない財」は、狭い意味での“環境財”と呼ぶのが適切だろう。なぜなら、この意味での環境財は、主体にとっての評価

³ このような認識の通有が現にある社会で見られるとすれば、それは、第3節で定義するような意味での文化子の一つだということができる。日本語には、「子供に先立たれる」とか「相手に気おされる」から、さらには「雨に降られる」とか「朝顔に釣瓶を取られる」といったたぐいの受け身的表現が多いが、そのことは、日本社会の中に、さまざまな事物が主体に及ぼす作用に敏感な文化子が存在していることを、強く示唆している。

の対象となっている財である。つまりその存在自体がプラスあるいはマイナスの価値をもつものとして主体の関心の対象になっているにもかかわらず、それを使用することもできなければ、その状態を主体自身の力ではどうにも変更できないからである。

第3図：財の分類



2

さまざまな主体が行う認識や評価の内容は、主体によってさまざまでありうるという意味では、“主観的”なものである。しかし、主体の行為の中には、相互の認識や評価の内容の（とりわけその枠組みとなるような、個々の事物やその変項や変域の分類の仕方の）共通化を目標とするもの、すなわち“コミュニケーション”が含まれている。コミュニケーションが有効に行われている社会では、“間主体的”ないし“客観的”な認識や評価が広く成立し、文明や文化の基盤となると考えてよいだろう。

文明や文化をどう理解するか、つまりどう定義するかは、人さまざまといたいほどに多種多様である。しかし、この本での文脈からすれば、文明と文化は、生物学でいう生物の表現型と遺伝子型の区別と似たような区別をしておくのが有用だと思われる。すなわち、まず、文明については、それが社会集団をなしている諸主体の生存のための装置群となっているという意味で、

文明 = 社会を構成している諸主体が、意識的に構築し定型化している
 文物（知識、思想、制度、物財等）の総体

と定義しておこう。そして文化は、

文化 = 社会を構成している諸主体が無意識的に維持し伝達して
いく文明の構築・運用原理（世界観や価値観）の総体

と定義しておこう。つまり、文化は一つの社会の成員が通有する暗黙知の一部だと考えるのである。この意味での文化は、その担い手にとっては、あたかも人が呼吸している空気のような、通常は意識にのぼらない特質であって、注意深い反省を通じて初めて、その一端が自覚的に捉えられるにすぎない。ともあれ、以下この本では、文明を構成しているもろもろの要素のことを“文明素”と呼び、文化を構成しているもろもろの要素のことは“文化子”と呼ぶことにしよう。⁴

以上のような文明と文化の定義に基づいて考えれば、文化の方が、文明に比べて相対的に変化しにくいだろう。同時にまた、文化は意識的、政策的に変更することが事実上不可能だろう。とはいえ文化もまた、未来永劫変化しないというものではなくて、いつどのようにしてかはともかくとして、時間の経過の中で、やはりなにがしかの程度は変化してきているように思われる。それでは文明や文化の変化は、どのような要因によって規定されているのだろうか。あるいは、先に見た“産出関係”の言葉を使うならば、文明や文化の“産者”は、何なのだろうか。

まず現在の文明については、過去の文明それ自身（つまり“歴史”）によって規定されている面が強いただろう。あるいは、個々の文明素に着目すれば、同じ文明の中の他のさまざまな文明素のあり方の如何によって大きな影響を、いわば“内生”的に受けているだろう。現存する総体としての文明を形作っている個々の文明素は、まったく孤立しているのではない限り、なにがしかの程度相互補完性をもっていると考える方が自然である。でなければ、失敗に終わった多くの改革の試みが示しているように、時間の経過の中で急速に淘汰されてしまうだろう。

現在の文明を規定しているその他の要因としては、先に「文明の構築・運用原理」だと定義した“文化”の存在が大きいことはいうまでもないだろう。だがそれ以外にも、“環境”要因、すなわち当該文明にとっての社会環境としての他文明や自然環境の存在も、当然考えられ

⁴いうまでもないが、自分がそのメンバーでない社会の文化は、反省してみたところではとらえられるはずはない。反省によって取り出した自社会の文化の特質と比較しながらの、注意深い観察を通じてしか、他社会の文化の特質は知りようがないだろう。とはいえ、実はそもそも自社会の文化でさえ、その特質をもれなく、そして系統的に明らかにするためには、何をどのように反省していけばよいかについては、確立した方法はまだないように思われる。文化子には、遺伝子の場合に見られるような、それに対応する物理的な実体は存在しないのかもしれない。存在するとすれば、それは多分、脳内のある種の神経回路のパターンの形をとっているのだろう。いずれにせよ、文化子の解析は、遺伝子の解析以上に困難なのではないか。

る。西欧文明に接触した幕末・明治期の日本文明が大きな影響を蒙ったことは周知の事実である。異なる気候条件が文明のあり方にさまざまな影響を及ぼすのも、十分ありうることである。またその他には、“政策”要因、すなわちさまざまな主体の行為、とりわけ文明の変革それ自体を目標とする行為は、その後の文明のあり方に少なからぬ影響を及ぼすだろう。⁵

同様に現在の文化の特性の説明にあたっては、過去の文化(“伝統”)を持ち出すことが、おそらくもっとも手軽な仕方だろう。それ以外の“環境”や“文明”要因の影響は、恐らくなにがしかの程度あるとは想像されるものの、単なる断定以上の説得力を持つ影響の仕方の具体的な解明となると容易なことではない。われわれの意思(“政策”)に、文化を変える力 とりわけ意図した通りにそれを変える力 があるかどうかは、はなはだ疑わしい。逆に、文化子が遺伝子の“突然変異”に似た変化をある種偶然的に起こすかどうかは、ほとんど想像の域を出ないだろう。先の注でも指摘したように、われわれはまだ、ここで定義した意味での文化自体の特性を、高い客観性を持って同定したり、体系的に分類整理したりする方法さえ、確立し得ていないのである。

3

そこで、とりあえずは文明に着目して、そのおおまかな分類を試みよう。分類の基準としては、文化の特質にかかわるものと、行為の技術の段階にかかわるものとの二つを採用しよう。

文化の特質にかかわるものとしては、当該文明が、“未来志向型”であるか“過去志向型”であるかという基準をとる。つまり、文明を記述する変項の一つとして、主体の時間志向性という二値の変項を採用する。ここで、未来志向型というのは、世界には常により新しいもの、より優れたものが生まれ、社会の状態は未来に行くほどよくなっていくという信念(文化子)をもつ文明である。逆に過去志向型というのは、天が下に新しいものはないか、もしもあればそれは過去のものに比べて劣ったもの、墮落したものに過ぎないのであって、社会の状態

⁵ 現在あるいは未来の文明のあり方がどのような要因によって規定されているかを論ずる“文明論”には、上述した諸要因のどれを重視するかによって、「歴史的」、「内生的」、「文化論的」、「環境論的」、「政策論的(あるいは政治的)」などと呼ばれるさまざまなアプローチがある。もちろん、それらのアプローチを総合した説明の枠組みが作れることが一番望ましいのだろうが、単なる列举という以上に立ち入って諸要因間の相互連関とそれが文明のあり方に及ぼす総体効果を明らかにするのは、容易なことではない。

は過去の“黄金時代”から遠ざかるほど劣悪になっていくという信念（文化子）をもつ文明である。行為との関連でいえば、未来志向型の文化をもつ文明は、社会的に共通認識された手段（たとえば“金”とか“権力”）の獲得を重視しがちであって、目標の選択は、個々の主体の自由に委ねがちだろう。逆に過去志向型の文化を持つ文明は、社会的に規定された共通の目標ないし戒律に即した行為を、より重視しがちだろう。

また行為の技術段階にかかわるものとしては、道具や言語の使用に始まる“人類革命”がその入り口となった“採集・狩猟段階”に始まり、一連の“農耕・牧畜革命”が起こる“農耕・牧畜段階”、および一連の“軍事・産業・情報革命”によって支えられる“軍事・産業・情報技術段階”という三つの値をもつ変項を採用する。⁶

そこから得られる文明の分類枠（タクソノミー）は、 $2 \times 3 = 6$ の文明型をもつものとなる。そこで、それらの6つの文明を、

未来志向型文明：

始代文明（前期採集・狩猟文明）

古代文明（前期農耕・牧畜文明）

現代文明（前期軍事・産業・情報文明）

過去志向型文明：

呪術文明（後期採集・狩猟文明）

宗教文明（後期農耕・牧畜文明）

智識文明（後期軍事・産業・情報文明）

とそれぞれ名付けることにして、それらの相対的位置関係を、次図（第4図）のように示そう。第4図では、諸文明は、技術段階を下から上へと上る形で進化して行くが、そのさいに、未来志向型と過去志向型に分岐すると想定している。

また、未来志向型文明は、左下から右上に上がる矢印で示されている。未来に向かったの発展志向が、右肩上がりの曲線に表現されてい

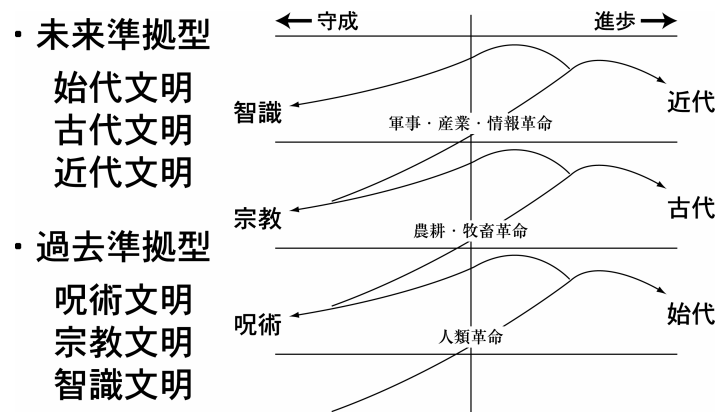
⁶ 最初の二つの技術段階を区別することの妥当性については、ほとんど異論はないだろう。第三の技術段階としては、産業革命だけに着目する人が多い。あるいはそれに軍事革命を加える人もあるが、“情報革命”については、トフラー以来、それを、採集・狩猟と農耕・牧畜の段階に続く段階への契機となる“第三の波”とみなす見方が圧倒的であり、近年の“情報革命”は、軍事革命と産業革命に続く同一技術段階の中での“第三の波”にすぎないと見る私のような立場は、まだ全くの少数派である。

だがそれにしても、農耕・牧畜革命が最初に起こったのが約1万年前であるのに対し、産業革命が起こったのが約200年前（軍事革命まで含めてもたかだか400年前）だとすれば、農耕・牧畜革命や産業革命に匹敵する新しい技術革命が、早くも20～30年前から起こり始めていると見るのは、歴史的な時間尺度の適用としてはいささか乱暴にすぎるとはならないだろうか。

るのである。その過程で、この型の文明は、いわば自生的に新しい技術段階への突破をなしとげ、さらに発展を続けていく。とはいえ無限の発展はありえないので、やがてどこかで成長の限界にぶつかって、崩壊してしまうというイメージが、矢印が頂点に達した後で反転する形で示されている。

これに対していったん上昇した後は右上から左下になだらかに下がっている矢印で示されているのが、過去志向型の文明である。この型の文明は、未来志向型の文明が発展の頂点に、あるいは成長の限界に達しかかるところに、ある種の意識革命の結果として出現すると想定されている。そして、未来志向型の文明の成果を、過去の輝かしい遺産として、なんらかの統一原理によって整理・統合することで、文明の形としては比較的速やかに一定の完成を見て“黄金時代”に到達するが、その後は、その状態を守成することに汲々としつつも、基本的に衰退の一途をたどるといったイメージでこれらの矢印は描かれている。⁷

第4図：文明の進化系統図式

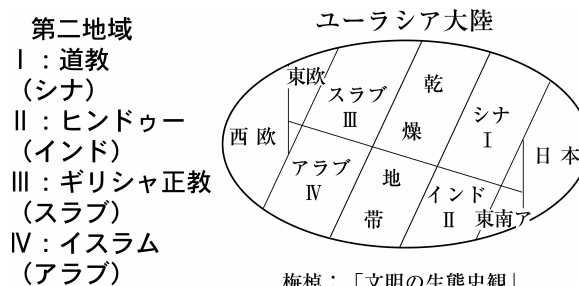


4

第4図に示した文明のタクソノミーに含まれる、それぞれの文明は、さらにさまざまな“分枝”をもっていると考えることができる。たとえば、ここでいう“宗教文明”は、“古典古代文明”と呼ばれるこ

⁷ 過去志向型文明が、新しいものをそれと認めない、あるいはそれに価値を見いださないのは、文化的な信念の問題であって、現実には、新しい発展、とりわけ散発的な技術進歩がこの型の文明においてもさまざまな時期にさまざまな形で自生したことは、疑いない。しかし、それは新しい技術段階への全面的移行というにはほど遠いものにとどまった。過去志向型の文明においては、新しい技術段階への移行は、自生的な突破としてではなく、突破をなしとげた未来志向型の文明の成果の模倣ないしは移植としてのみ可能だったのである。また、衰退の傾向に抗して新しい展開が意図的に追求される場合には、それは、イデオロギー的には、未来への突破ではなく、過去の栄光の“復古”あるいは“維新”としてのみ許容され得た。

ともあり、その淵源を、ユーラシア大陸（旧世界）の中心部（梅棹忠夫のいう“第二地域”）において古典古代にいっせいに開花した、いくつかの“高度宗教”ないし“有史宗教”にもっている。梅棹（『文明の生態史観』、1957年）はそれを、第5図に見られるように、ヒンドゥー教に立脚するインド文明、イスラム教に立脚するオリエント文明、道教に立脚するシナ文明、ギリシャ正教に立脚するスラブ文明の四つの分枝に分けている。他方、ユーラシア大陸の西と東の周辺部にあたる“第一地域”には、“近代文明”がそれぞれほぼ並行的に出現し、進化してきたと見る。すなわち西欧文明と日本文明である。この梅棹の見方を借り、さらに新大陸にも近代文明が伝播したと考えるならば、近代文明には三つの主要分枝を区別することができる。⁸

第5図：文明の生態史観⁹

戦後の日本がようやく高度成長期にさしかかりつつあった1950年代半ばの日本で称えられた梅棹の“文明の生態史観”は、日本の文明を

⁸ 梅棹は後に、西欧近代文明の小分枝として東欧文明を、日本近代文明の小分枝として東南アジア文明を追加している（第5図参照）。

⁹ “文明の衝突”論で話題をなげたサミュエル・ハンチントンが、現存する世界の主要文明を七つないし八つに分けている。すなわち、（1）西欧文明、（2）東方正教会文明、（3）中華文明、（4）日本文明、（5）イスラム文明、（6）ヒンドゥー文明、（7）ラテンアメリカ文明と、（8）アフリカ文明である。これを見れば、ハンチントンもまた、私のいう宗教文明の四大分枝にあたる文明を、それぞれ識別していることは明らかである。また、私の枠組みでいえば、アフリカ文明は、恐らく“呪術文明”に、ラテンアメリカ文明は、それが依然として近代文明とは異なる文明だとするならば、恐らく“古代文明”に、含めることができるだろう。ハンチントンに欠けているのは、日本文明を西欧文明と並ぶ“近代文明”の一分枝と見る視点である。同じくまた、東方正教会文明や中華文明、イスラム文明、ヒンドゥー文明を、“宗教文明”の諸分枝と見る視点である。そのために、彼のいう“文明の衝突”の本質が、私の用語で言えば“近代文明と宗教文明の衝突”にある点が、ぼやけてしまっている。

逆に、新大陸の文明を、“近代文明”の一分枝として一括する私の視点は、それはそれで論議の余地のあるところだろう。しかし、少なくともこれから21世紀にかけては、東欧を西欧近代文明の、東南アジアを日本近代文明の、それぞれ小分枝とみなすのが適切だとすれば、ラテンアメリカを北米近代文明の小分枝とみなしてもよいのではあるまいか。

なお、この点との関連でいえば、現存する社会がもっている文明（や文化）は、ここで考えているような“純粹種”というよりは、さまざまな文明が多層的にたたまこまれた“雑種”型の文明（や文化）であると見る方が、より実態には近いかもしれない。実際、近代文明の典型のように見られるアメリカにも、宗教文明の影響（たとえばキリスト教原理主義）は根強く残っている。日本社会も儒教や仏教の影響を色濃く残している。いやそればかりか、より古層にある呪術文明・文化の影響力も、いまだに小さくない。

西欧文明に比肩しうる近代文明の一分枝として捉えた点で、画期的な見方であった。それは当時の日本人を感奮興起させた。しかし、梅棹理論は、宗教文明と近代文明の間の相互作用についてはとくに何も述べていない。これに対し、ユーラシア大陸の南方の海洋に注目しつつ、“近代化革命”の発生の機縁を論じたのが、沈滞の淵に沈んでいた1990年代の日本で、『日本文明と近代西洋』（1991年）や『富国有徳論』（1995年）『文明の海洋史観』（1997年）など一連の著作を通じて精力的な論陣を張った川勝平太であった。

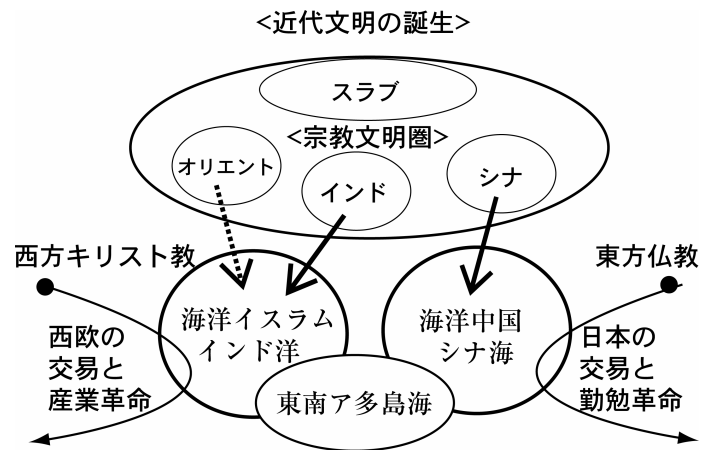
第6図は川勝の理論を私なりに図式化してみたものである。図の上部にあるのがユーラシア大陸で、ここには当然、梅棹のいう四大宗教文明圏がある。川勝はそれに加えて、南の、インド洋からシナ海、あるいは東南アジアに広がる多島海地域にも、ある種の高度な文明があったと主張する。宗教文明圏の本来の周辺部は、ユーラシア大陸の西や東のはずれではなくて、むしろこの南方多島海地域だったというのである。

すなわち、ここに、宗教文明圏からまず人が流れ出てくる。食い詰めたためか野心を持ってかは知らず、シナ文明からは“華僑”が、インド文明からは“印僑”が、かれらの持つ宗教（文明）と共に流れ出てくる。そしてもともと人口が少ないオリエントからは、もっぱらイスラムの教えがやってくる。そして、そこに交易のルールやシステムが生まれた。そこには、西洋や日本から見て非常に興味深い文物（川勝の言葉でいえば“物産複合”）、たとえばコショウ、茶、金などがあったので、そこと交易をしようということで、14～16世紀の“大航海時代”には、東洋からは琉球人や日本人（倭寇）が、西洋からはポルトガル人、スペイン人、オランダ人、イギリス人が、海賊とも商人ともつかないような形でやってくる。

そこで、川勝理論の面白いところは、しかし、しばらくすると日本人もヨーロッパ人も、多島海文明との交易からは手を引いてしまったという事実注目するところにある。彼らは、わざわざ輸入してこなくてもそれと似たような、あるいはもっと優れた文物を、自分たちの手で、作りあげてしまった。ヨーロッパ人はそれを機械の力を借りて行い、“産業革命”がおこった。日本人は、機械ではなくて頭や手を使って、高度な技術や金融のシステムを作り上げた。これが、最近では経済史学界の通説にもなった“勤勉革命”に他ならない。そして日本人は、日本列島の上に高度な文明を発展させることで満足していたのに対し、ヨーロッパ人の方は産業革命が生みだした軍事的・経済的なパワーをもって、18世紀から19世紀にかけて再びアジアに舞い戻ってきて、そこを植民地にしようとした。以上が川勝理論のエッセンスである。ヨーロッパと東アジアが南アジア多島海地域との間に行った交

易が、産業革命や勤勉革命の契機となったという川勝の立論は、なかなか卓抜だといえよう。

第6図：文明の海洋史観



5

しかしそれにしても、“近代化”それ自体の出発点を川勝のいう西欧の“産業革命”や日本の“勤勉革命”に求めるのは、遅きに失するように私には思われる。正確にいつのころからかはともかくとして、近代化は、“近代文化”とでも総称できるような一連の文化子が西欧や日本の社会に出現したより古い時代、たとえば日本でいえば平安末期の武士の台頭や、ヨーロッパでいえば、ローマ帝国の周辺から王権が独立し封建化していく時代、から始まったとみなす方がよいのではないか。つまり、私はそのような文化の変異の結果として、軍事革命や産業革命のような技術革命において突破を達成する文明が次第に形作られていったのであって、その逆ではないと考えてみたいのである。

それでは、未来志向型の文化の一種である“近代文化”の中核にはどのような文化子があると考えられるだろうか。私は、次の三つの文化子からなる“近代主義”がそれだとしてみたい。すなわち、

- 1．進歩主義
- 2．手段主義
- 3．自由主義

こそが、近代文化の三本柱だといいたい。それらは、過去志向型の文化の一種である“宗教文化”とでもよぶべき文化のもつ特性とは、対

極にある特性である。

ここで“進歩主義”とは、「自分たちが住んでいる世界の過去は、より貧しく、より暗く、より遅れているのに対し、未来は常に、より明るく、より輝かしく、より進んでいる。世界の状態は時と共により改善される方向にむかって不断かつ無限に変化している」という信念をさす。“手段主義”とは、「そのような進歩・発展は、適当な手段を選択し使用すれば実現できる、つまりわれわれ自身が進歩を作り出す事ができる、進歩は誰か他人によって与えられるものでなく自分たちで作りだすものだ」という信念をさす。“自由主義”とは、「進歩の達成のためのもっとも有効な手段は、思考や行動の自由であって、人は自由に思考し行動しさえすれば、目標の実現にとって最善の手段を見つけだして、もっとも良い進歩をもっとも急速に達成できる」という信念をさす。もちろんこれらの信念の全面的な正しさについては、経験的な根拠もとくになければ、理論的な必然性もない。そして、こうした基本的信念（文化）を持っていない文明は、世界中にいくらでもある。“宗教文明”はその最たるものである。

さてここで、この本での私の基本的な立場を述べておこう。

それは、日本に棲むわれわれがその中で生きているいわゆる近代文明、およびそれを支えている近代文化は、まだまだ終わらないとする立場である。これまでもしばしば、早くは昭和の初期から、“近代の超克”という事がいわれたし、1970年代にもまたまた“ポストモダン”論が台頭を見たが、にもかかわらず、“近代”は一向に終わりそうもない。それどころか、近年では“情報革命”と呼ばれるような社会変化が起こっていて、技術や経済の発展が、まさにわれわれの眼前で、日々大変な勢いで進んでいる。その限りでは、進歩の速度はむしろ加速している。なるほど、これまでのようないってみれば手放しの楽観的進歩主義にはさまざまな面からの反省が加えられているとはいえ、冷戦の終焉と共に、あるいは情報革命の本格化と共に、手段主義や自由主義の信念体系は、ますますその影響力を強めているように見える。“近代主義”は今後より成熟した、より謙虚でしなやかな信念体系に変貌していくにせよ、その過程で近代文明は、少なくともここ当分は、まだまだ事実として発展を続けていくのではないかと。